

【丹波篠山市講演会】

光秀の丹波平定

—八上城攻めに寄せて—

2019/11/17 於：四季の森生涯学習センター西館 講師：桐野作人

はじめに—明智光秀と八上城—

来年は明智光秀が主人公となる大河ドラマ『麒麟がくる』が放映されます。光秀の大出世のきっかけとなった丹波平定もかなりの比重で描かれるかもしれません。

ご当地には、光秀の丹波平定において、もっとも重要な城郭だといってよい八上城があります。当時の当主は波多野秀治（？～1579）でした。秀治は一度は光秀に従いながら、光秀が氷上郡黒井城を攻めている隙に裏切れます。そのため、第1次の丹波平定戦は失敗に終わります。

その後、敗北と激務が祟った光秀は病床につきます。回復すると同6年から第2次平定戦が始まり、光秀はその大部分を八上城攻めに注力しました。光秀は同城のまわりに「獸の通ひもなく」（『信長公記』卷11）というくらい厳重な包囲網を完成させ、徹底した「干殺し」作戦をとりました。

波多野兄弟もじつに1年3カ月の長きにわたって籠城しましたが、城中から餓死者が多数出て、士気も下がったため、同7年6月、調略によって兄弟を召し捕りました。光秀は波多野兄弟を安土城に連行して城下の慈恩寺町末で処刑します。これの戦功により、光秀は信長から丹波・丹後両国を拝領し、一躍、国持大名へと出世しました。

この「召し捕り」から、光秀母「お牧の方」が人質になったのではないかという逸話が形成されたのではないかという気がします。その初出は17世紀後半の遠山信春著『織田軍記』（別名：総見記）だと思われます。その後、18世紀末、『絵本太閤記』などによって大衆化されて、多くの人々が知るところになりました。現在、ご当地でもこの逸話を大事にしていると聞いています。

光秀の丹波平成は各方面から賞賛されました。波多野兄弟が連行されるのを見た京都の商人立入宗継（入道隆佐）は、光秀を「前代未聞の大将、名誉の大将也、弓取は煎じて飲むべき事」と書き、信長も「丹波国日向守（光秀）働き、天下の面目をほどこし候」と絶賛しました。

今回は、光秀の八上城攻めを中心に、以下のような構成で本能寺の変後、非業野史を遂げるまでの光秀の生涯を追ってみます。

1. 光秀の出自と越前時代
2. 信長との出会いと坂本城
3. 八上城攻めと丹波平定
4. 苦戦の光秀、重病に
5. 波多野兄弟の反撃
6. 八上落城と波多野兄弟の死
7. 伝説 光秀の母の悲劇
8. 本能寺の変と最期

表5 明智光秀の丹波攻略年表

年月日	経過	掲載資料
天正3年6月7日 (1575)	織田信長が川勝継氏に、丹波に派遣する光秀への協力を命じる。	領主編6
7月24日	宇津頼重征討のため、桐野河内まで出陣する。小畠左馬進に宇津城の包囲戦に備え、鉤・鍔など普請道具を用意し、仙人を動員するよう命じる。	領主編65
8月 ~8月下旬	越前一向一揆の攻撃に出張する。 宇津頼重が反撃し、馬路・余部城を攻撃する。光秀方の援軍、小畠左馬進が負傷する。	領主編11・14 領主編11
9月2日	信長が、光秀に丹後攻めに転じるよう命じる。	領主編13
9月16日	坂本に帰着中の光秀が、小畠左馬進に来る21日に丹波出陣予定と伝える。	領主編14
10月1日	信長は片岡藤五郎に、光秀の丹波攻略に対する助力を命じる。	領主編15
10月初旬	信長のもとに、光秀から丹波攻略についての情報が伝えられる。	領主編17
10~11月	竹田城を攻撃中の荻野直正が、光秀の丹波侵入を知り、急ぎ黒井城に帰還、籠城する。光秀は、黒井城の周囲12~13ヶ所に相陣を構え、包囲戦の準備にとりかかる。	領主編19
11月下旬	丹波国衆の多くを味方につける。	領主編19
12月2日	丹波国の百姓に徳政令を発布する。	領主編20・21
天正4年1月15日 (1576)	八上城主波多野秀治が離反、黒井城の荻野直正に味方し、光秀軍は敗退する。	領主編22・23
1月18日	娘婿津田信澄、光秀を丹波に見舞う(光秀、桑田郡あたりまで退却か)。	領主編23
1月21日	坂本に帰城する。	領主編23
2月18日	丹波に下向(戦後処理の一環か)。	領主編27
年月日	経過	掲載資料
天正5年1月晦日 (1577) 10月29日	長沢又五郎らに対し、亀山惣堀普請を命じる。糸井城を攻める。	領主編31 領主編34
天正6年3月4日 (1578) 3月20日	丹波国多紀郡や奥郡への道の整備を命じる。八上城の波多野秀治を包囲し、兵糧攻めに入る(天正7年6月の落城まで)。	領主編35
4月	大坂(石山)本願寺攻めに参加する。	
4月10日	丹波に戻り、荒木氏綱の居城(園部城)を陥落させる。	
6~7月	播磨国攻めに参加する。	
9月	丹波の国衆に大規模な反乱あり。光秀、急遽出陣し、亀山城を拠点に小山・高山・馬堀城を落とす。	
10月	摂津国有岡城主の荒木村重が、信長方に謀反を起こす。光秀が調停工作を試みるが失敗。	
11月3日	佐竹出羽守に対し、亀山城の普請を延期し、森河内に集結するよう命じる。	領主編46
11月上旬	波多野秀治が光秀の留守に乗じて、八上城から出兵し亀山近辺を攻める。小畠越前守らが防戦し退却させる。	領主編47
12月	八上表に乗り込み、八上城の包囲を厳重化する。	領主編49・50
天正7年1月 (1579)	八上城包囲中の小畠越前守が討死する。	領主編51
2月28日	坂本を出て、亀山に着陣する。	領主編54
3月16日	八上表に着陣する。	領主編54
4月4日	和田弥十郎に、兵糧攻めにより八上城に400~500人の餓死者がでていることを伝える。	領主編58
5月5日	八上城の支城氷上城が落城し、波多野宗長・宗貞父子が自殺する。	
6月1日	八上城が落城する。400余名が討死し、波多野秀治・秀尚ら三兄弟が捕縛される。	領主編60・61
7月24日	桑田郡北部に侵攻し、宇津頼重は逃走する。	領主編64・66 ・67
7月	鬼ヶ城を攻め、ついで細川藤孝とともに丹後国に侵入する。弓木城の一色義有を降伏させ、丹後国を平定する。	領主編64
8月9日	赤井忠家が籠城する黒井城を陥落させる。	領主編68
10月24日	安土の信長に、丹波・丹後国平定の報告のため参上する。	

『資料編第二巻』、高柳光寿『明智光秀』、『信長公記』などによる。

新修亀岡市史 本文編二

歴史大辞典

はとのひではる 波多野秀治 ? — 一五七九
戦国時代の武将。丹波国多紀郡を支配する土豪で八上城主(兵庫県多紀郡篠山町)。織田信長の支配に激しく抵抗した。天正五年(一五七七)より明智光秀・細川藤孝らによる山陰道攻略が始まり、同年末に丹後・但馬の国人衆が波多野氏に対して反乱を起したのに乘じて、光秀は八上城を包囲した。『信長公記』によれば、館の三里四方を光秀の軍勢が取り巻き、

堀を掘り柵を幾里にも取り巻き、堀際には町屋のような小屋掛けをして見張番を置き、獣も通れぬほど厳重に警備したといわれる。籠城者のうち餓死が続出し、ひそかに脱出企てる者は斬られるという状態が続いたが、秀治は一年余り堪えぬき、降伏の勧めにも応じなかつた。天正七年光秀は自分の母(異説あり)を人質にして和議を申し入れ、秀治が城から出たところを捕えた。秀治は安土へ護送され、六月一日城下の淨嚴院で磔刑に処せられた。護送中に死んだという説もある。これによつて波多野氏は滅亡した。

日本人名大辞典

荻野直正 (1529~78)
戦国・織豊時代の武将。

享禄2年生まれ。赤井家清の弟。外舅の荻野秋清を殺し、天文23年丹波黒井城(兵庫県)城主となり、悪右衛門と称されたといふ。田信長の丹波制圧に抵抗し、天正3年以後明智光秀に攻められたがよく防戦した。天正6年3月9日死去。50歳。本姓は赤井。幼名は才丸。

参考文献 「兵庫史学」四三 (三鬼清一郎)

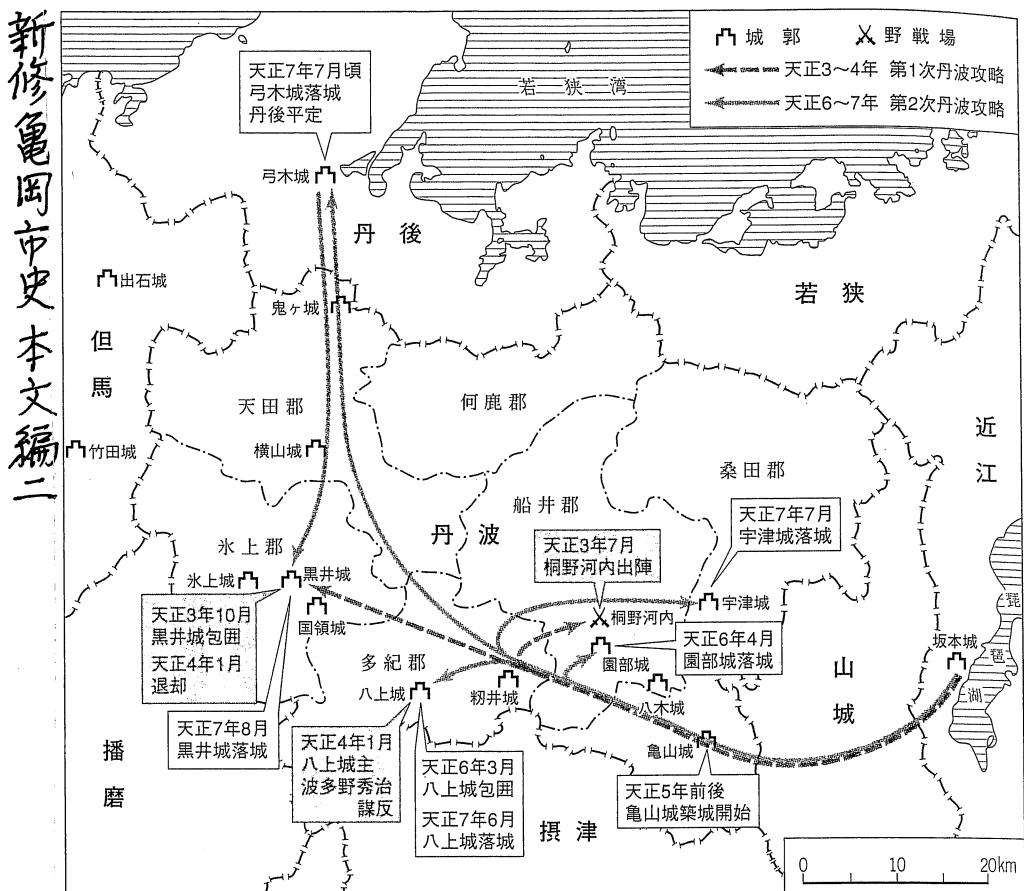


図 17 明智光秀の丹波攻略図

信長公記

卷十一 天正六年（一五七八）

戊寅四月十日、滝川・惟任・惟住両三人丹波へ差遣はされ、御敵城荒^四木山城居城取巻き、水の手を止、攻められ、迷惑致し降参申し退散、^き去て、惟任日向守入置き。

同右十二月
ニシタチ

（續）維任日向守は直に丹波へ相働き、波多野が館取巻き、四方三里
がまほりを維任一身の手勢を以て取巻き、堀をほり堀、柵幾重も付
けさせ、透間もなく堀際六まよひそに諸卒町屋作に小屋を懸けさせ、其上、廻
番ばんを丈夫に、警固を申付けられ、誠に獸の通ひもなく在陣候なり。

卷十二 天正七年(一五七九)六月初めか

(五) 去程に、丹波国波多野の館、去年より維任日向守押詰取巻き、三里四方に堀をほらせ、堀・柵を丈夫に幾重も申付け、責められ候。

(五) 去程に丹波国波多野の餉。去年より絶日向守押詔取巻き三里四方に堀をほらせ、堀・柵を丈夫に幾重も申付け、責められ候。籠城の者既に餓死に及び、初めは草木の葉を食とし、後には牛馬を食し、了簡尽果無体に罷出候を悉く切捨、波多野兄弟三人の者調略を以て召捕り、

六月四日、安土へ進上。則、九慈恩寺町末に三人の者張付に懸けさせられ、さすが思切りて、前後神妙の由候。

同右

(六) 八月九日、赤井悪右衛門楯籠り候黒井へ取懸推詰候處に、人數を出だし候。則、喧と付入に外くるはまで込入り、随分の者十余人討取る処、種々降参候て退出。維任右の趣一々注進申上げられ、永丹波に在國候て粉骨の度々の高名、名譽比類なきの旨、悉くも御感状成下され、都鄙の面目これに過ぐべからず。

七、黒井城。兵庫県氷上郡春日町黒井。赤井氏の居城。天正元年（一五七八）、赤井直正は明智光秀の攻撃を受け、同六年には死亡した。子の直照は幼少なので伯父の赤井悪七郎直正が陣代として守備した。

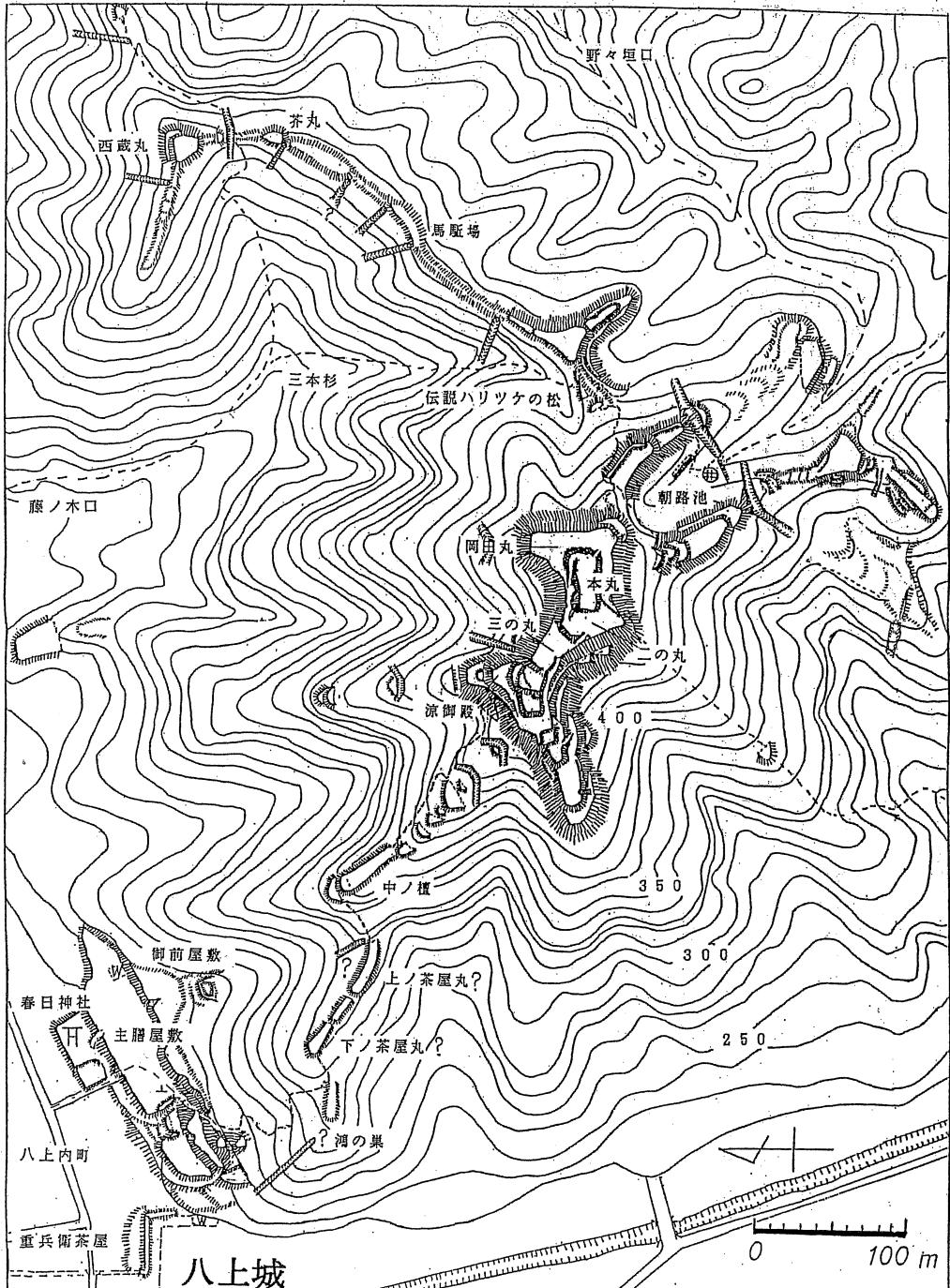
九 滋賀県蒲生郡安土町慈恩寺に淨嚴院がある。

七 意思、考え。ここでは耐え忍ぶ
の意（補注一）。
八 無理やりに。

信長公記

卷十二 天正七年(一五七九)

十月廿四日、維任^{ニシタテ}日向守、丹後・丹波両国一篇に申付け、安土へ参り御礼。其時志々良百端進上候キ。



高橋成計「丹波八上城攻めの戦場を歩く」

『織豊期研究』7号 2005年

卷十三 天正八年(一五八〇)八月十二日

覚

一、父子五ヶ年在城の内に、善惡の働きこれなき段、世間の不審余儀なし。我々も思ひあたり、言葉にも述べがたき事。

(中略)

一、丹波国日向守働き、天下の面目をほどこし候。次に羽柴藤吉郎、数ヶ国比類なし。然て池田勝三郎小身といひ、程なく花熊申付け、是又天下の覚を取る。爰を以て我が心を発し、一廉の働きこれあるべき事。

一、柴田修理亮、各働き聞及び、一国を存知ながら、天下の取沙汰迷惑に付いて、此春賀州に至り、一国平均に申付くる事。

(後略)

の放生院（橋寺）に宇治橋断碑がある。

三 信長が佐久間信盛父子を責めて追放し、その善後処置を筒井順慶に指示した朱印状もある。なお『高野春秋』では折檻の日を十五日とし、

る。

七 将来に対する思慮。みとおし。

八 勝敗の機を見分ける。

九 一方的な考え方を固執し持久戦を続けたのは思慮もないことで、紛れもなく未熟である。

三 明智光秀の丹波平定（天正七年）をさす。

二 羽柴秀吉の播磨・但馬・因幡平定をさす。

三 池田恒興は小禄の者だが、長い期間もかけず揖津花隈城を陥落させ、天下に名譽を施した。

新訂兼見卿記

第一

をし信と室梵北依秀光療曲中光
長共及舜野賴の秀治直に秀病
は光使にびに社さき病室を瀕病攝
し秀者赴満招代る祈よ受道み津の
むのをく千か官代れ詣念よりく三歸の
病派

惟日以外依所勞阪陣、在京也、罷向、道三療治云々、
廿四日、丙辰、惟日祈念之事自女房衆申來、撫物以下之事以一書返答
(准任光秀室、妻木氏)
廿五日、丁巳、北野、名代詣、安田右近允、
(右宗)
廿六日、戊午、招請舜藏主朝殮之間罷向、青女、滿千代丸、入夜自惟
(兼和室佐竹氏)
寺祈念之事申來、爲惟日御見廻自左大將殿隼原御使云々、
(准久)

惟日以外依所勞阪陣、在京也、罷向、道三療治云々、
惟日祈念之事自女房衆申來、撫物以下之事以一書返答
(准任光秀室妻木氏)

以大中

1000

入夜自惟日女房衆、

以大中

增補訂言經鄉記第六 権大納言山科言經

十二日、甲戌、天晴、

一、先考忌日之間、
清和院之西坊齋二呼相伴、松林院指合之間如此；

明智十兵衛尉号緑任日向守、久風痴煩、明暎死去、坂本へ行云々、

明智光秀 史料で読む戦国史

85 明智光秀書状
〔泉正寺文書〕・三河) ○モト折紙

猶荒藤事、以貴面可申候、以上、

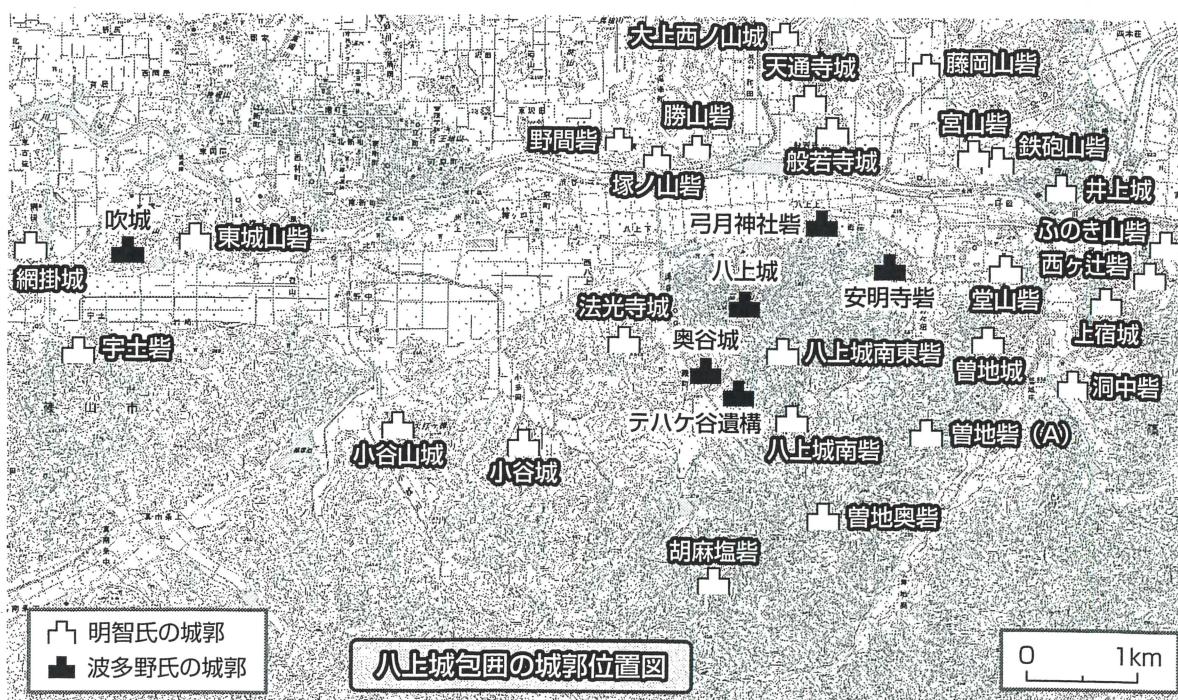
至于籠山敵取懸及合戰候、明越討死仕候儀、難成筆者

據糟手之由候條、藥□□進之候、來』二日、其表相勵、由斷有間敷候、此仁糙口上申含候、恐々謹言、

(天正七年)
二月十六日

日向守
光秀(花押)

(ウハ書)
「(切封墨引)」



90 明智光秀書状写

(大阪青山歴史文学博物館所蔵「下条文書」) ○ 硫紙

就在陣御飛脚、殊太刀一腰并飼廿枚送給候、誠遠路御

音信別而御入魂之至欣悦不浅候、抑此面弥丈夫取詰

候、丹波多紀郎八上之事、助命退城候様与替色替様令懇望候、は

丹波多紀郎籠城之輩八上城四五百人も餓死候、罷出候者之顔ハ青腫

候て、非人界之躰候、兎角五日・十日之内、必可討果

候、一人も不取洩之様与存、為逆要害・壙・柵・乱

概・逆茂木弥上取重、落居待時為躰候、追而吉左右可

候、さ候とて請取候備を破、城へ取付候事、一切可為

申入候、隨而當城於相果者、直至其國丹後可令出張之旨、

被仰出候、御身上之儀、聊以不可存疎意候、猶以遠路

寄思召蒙仰段、不可相忘候、委曲同名少兵衛尉可申

候、恐々謹言、

光秀(花押影)

九月
(天正七年)

和田弥十郎殿
御宿所

彦介殿
(天正七年)

光秀(花押)

田中口助殿
(常好)

彦介殿

91 明智光秀書状

(大阪青山歴史文学博物館所蔵「小畠文書」)

乍些少、初瓜一遣候、賞翫尤候、已上、

城中調略之子細候間、不寄何時、本丸焼崩儀可有之

候、さ候とて請取候備を破、城へ取付候事、一切可為

停止候、人々請取之所相支、手前へ落來候者ハかり首

可捕之候、自余之手前へ落候者、脇より取合討捕候事

有間敷候、縱城中燒崩候共、三日之中ハ、請取候之可

蹈陣取候、其内二敵落候者令捨遣可討殺候、さ候ハす

ハ人數かた付候、味方中之透間と見合、波多野兄弟足

之輕者共、五十・三十二て切勝候儀可有之候、從之彼

□可相蹈と申事候、若又々つれ出候ニをしてハ、最前

遣書付候人數之手わり、可相勵可有覺悟候、猶以、城

落居候とて彼山へ上、さしてなき乱妨ニ下々相懸候

者、敵可討洩候間、兼々乱妨可為曲事之由、堅可被申

触候、万於違背之輩者、不寄仁不背、可為討捨候、於

右之趣、毎日無油断下々可被申聞候、至其期不相殘物

候、可被得其意候、恐々謹言、

五月
(天正七年)

光秀(花押)

(前次)

自然かハラのもの共、京都御普請ニ隙入候

所御下知にて難被仰付候ハ、村井長門守貞勝

被仰候て、かならす夜を日ニ付御馳走可申候

追而申候、かハラの者隨分にてまいり候者

右へ折紙不及被遣候、御分別次第に候、此外

未明より國領へ取懸、申下刻ニ責破、悉打果、

以來之鬱憤散候、因茲赤井城裏蘆田一族城

領之城之上丹波水土郡、深山を一里余切抜、新道を付、

山へ取上、同廿一日ヨリ先年拙者在城

九月廿三日

光秀(花押)

惟任日向守

94 明智光秀書状

(東海大学附属中央図書館所蔵「北尾コレクション」) ○

遠山信春 織田軍記(別名: 総見記)

織田軍記

卷第十九

惟任光秀丹州勧事附赤井惡右衛門景遠事

三〇八

左京亮宗繼入道隆佐記(卷子)

丹波国(明智光秀)

丹波国惟任日向守、以御朱印、一国被下行時に、理功

運被申付候、前代未聞大将也、坂本城主志賀郡主也、

多喜郡高城波田野兄弟扱にて被送、剩於路次からめ

とり、安土へ馬上にからミつけ、つゝをさし、ほた

ちをうち、はたのおと、いはたものに被上候、前代

未聞也、

天正七年六月十日二京都を通也、

美濃国住人ときの隨分衆也

其後從上様被仰出

明智十兵衛尉

(箭) (鶴)

惟任日向守二なる

-7-

功成就せしめ、秀長等播州へ歸陣すと云ふ、光秀數年當表相支ふといへども、其功未だ成らず、今度又羽柴におくれ、剩さへ八上の城いつ落つべしとも相見えざるに依て、光秀萬人の嘲嘆、兼ては又大臣家御父子の御機嫌覺束なく思案し、進退惟窮るの間、是に於て光秀又思慮を廻し、敵方の荒木山城、高屋筑後と云ふ者に便り、本日の山伏西藏院と、愛宕山の大善院を仲人とし、和談を囁ふ、其意趣は、今度大臣家丹州征伐の事、更に一分の遺恨なし、只天下一統の功を立て、萬民太平の世を期する者なり、然らば今とても大臣家の幕下に屬せば、丹波一國安堵を給はり、波多野家立て置かれん事、是れ大臣家の御内存なり、此旨光秀七枚の誓詞を認め相渡すべきの間、早く秀治和談に歸伏し、出城然るべき乎と云ふ、秀治等猶是を疑ひ、定めて光秀謀計たらんと、更に以て許容せず、光秀又思案を厚うし、重ねて彼の仲人に云ひ遣はすには、然らば秀治疑ひを散ぜよ、當方謀計にあらざる段證據のために、光秀が老母を人質とし、秀治に相渡すべきの間、秀治此條信伏し、大臣家へ御禮申され、一家を全うせらるべしと云ふ、是に於て秀治兄弟安堵し、其儀ならば和談の儀相心得たりと云ふ、既に今五月廿八日漸く和睦相調ひて、光秀方より老母を渡し、秀治

方へ人質とし、八上の城へ入れ置かしめ、和平彌成就せしむ、是に依て今日六月二日、右衛門大夫秀治、同弟遠江守秀尚等、八上の城を出で、光秀對面のため、本目の城へ入來す、光秀是を悦び、本目の城にて彼の兄弟を待ちうけ、双方面談一禮畢つて祝儀として盃を出し、酒宴に及ぶ時兼てより光秀方々に隠し置きたる多勢、俄かに競ひ出づる秀治、秀尚心得たりとて、大刀を抜いて相勵くといへども、數兵前後を圍んで、終に秀治、秀尚を揚捕り、其外從者十一人、都合十三人を相揚めて、早速安土へ差し上せ、此趣き言上し畢んぬ、秀治は痛手負ひて、路次に於て死去し畢んぬ、其後秀尚等安土に於て生害の以後、丹州の殘黨等、光秀人質の老母を張付に懸けて殺し畢んぬ、同月四日、丹波國の御敵、波多野氏兄弟三人、當所慈恩寺の町末に於て、張付に懸けさせ誅せられ、其外生捕ごとも悉く誅せられ畢んぬ、是れ則ち一昨日惟任光秀揚捕り、進上せしむるに依てなり、何れも最期の次第、一々神妙の由是を沙汰す、六月十三日、丹後國の住人松田攝津守盛秀、巢鷹二居是を獻上す、同月十八日、三位中將殿、岐阜より御見廻として安土に到り、御上著、同月廿日、伊丹表在城の面々、瀧川、峰屋、武藤、惟任、福富此五人へ、鶴三聯、小男鷹二